

## 独立自営

自分で箸をとることは独立自営の心を養うことに繋がる。独立自営の精神とは、すべての物事を自分で決し、自分で責任を取ることである。

戦国武将の前田利家が臨終を迎えた時、妻のまつ（芳春院）が枕元に近寄り、「殿は若い時から度々の戦場に出られ、多くの人を殺してこられた罪業は深いものがあります。日頃は見苦しいと言われるでしょうが、私が予てから縫っておりました経帷子をお着せして棺にお入れしたいと存じます」と言った。経帷子は無事あの世に行つて成仏できるようにするための衣裳である。死者はこれを着ると罪業が消滅し、地獄の苦しみを免れると信じられていた。

激動の乱世を共に行き抜いた妻ならではの配慮だったが、利家は莞爾として、「私は乱世に生まれ、そここの戦場に赴いて敵する者を殺したが、理由無く人を苦しめたことはない。然れば、何の罪があつて地獄に墮ちると言うのか。もし、冥途で牛頭馬頭が我を侮り責め苛むとするならば、以前にこの世を去つた当家の勇臣を前後に従え、鬼どもを攻め、死後の世界に威をふるうであろう」と言つて事切れたという。

独立自営の精神は武士道精神の中核をなすものであるが、松下幸之助も、「何事をなすにあたつても自主独立の心を持たず、他を当てにし、他に依存していたのでは真の成功はおぼつかない」（『指導者の条件』 p 159）と述べている。共同体的風土の強い日本の企業においては、ややもすると会社への依存体と化す社員が多い。しかし、社会に出て一働きしようとする者は、前田利家や松下幸之助のように、仮にも依存心を起こしてはならず、自立と自律の精神を貫かねばならない。

自分で色々と考え、自ら行動するという自主性をもって仕事をすることで、仕事の成果もあがり、かつ自分が生長する。独立自営を旨として行動するといつても、社会を顧みなければ独立が孤立になり、また、恩を忘れて知人をも顧みなければ、ただ自己本位のみとなつて誰からも相手にされなくなる。独立自営とは自分勝手に振舞うことではないことに留意しておくが良い。